

2-III-12

患肢を温存しえた壊死性筋膜炎の2例

荻窪病院整形外科¹⁾, 清水市立病院²⁾

はらかわ ひろえ
○原川 尋江¹⁾, 岡崎 真人¹⁾, 河野 亨¹⁾,
田崎 憲一¹⁾, 谷島 浩²⁾

[目的]劇症型 A 群溶連菌感染症は、電撃的な経過をたどり、死亡率が高く、近年本邦を含め世界的に報告例が増加している。今回、劇症型 A 群溶連菌感染症による壊死性筋膜炎に対し、早期診断、外科的治療が奏功し患肢を温存しえた2症例を経験したので報告する。[症例1]68歳女性。平成14年6月19日紫陽花を手入れした後、左前腕部腫脹・疼痛自覚した。翌日当院皮膚科受診しペラシリンナトリウム 4g/日の投与開始するも、病変部の拡大傾向を認め当科転科となった。前腕部を中心に表皮剥離、壊死を認め、壊死性筋膜炎を疑い6月25日広範囲デブリドマン施行した。細菌学的検査でA群溶連菌が同定され、臨床症状と併せ劇症型 A 群溶連菌感染症と診断した。局所の炎症反応が鎮静化した術後4週目に遊離植皮術を行った。[症例2]32歳男性。平成14年12月16日誘因なく右第一趾疼痛出現し、近医にて痛風と診断されNSAIDs 投与にて経過観察されていた。次第に足背部に腫脹・発赤が拡大したため3日後当科受診した。皮膚は紫褐色調で紫斑が散在し、急速な病変部の拡大も認めたため、壊死性筋膜炎を疑い抗生剤ペラシリンナトリウム 8g/日の大量投与開始し、12月21日広範囲デブリドマン施行した。細菌学的検査ではA群溶連菌と同定され、臨床症状と併せ劇症型 A 群溶連菌感染症と診断した。術後、局所の炎症所見の鎮静化を認め、術後4週間で遊離植皮術を行った。[考察]劇症型 A 群溶連菌感染症はA群溶連菌による多彩な症状を伴う症候群であり、急速に進行し多臓器不全を生じ死の転機をとることも少なくない。特に壊死性筋膜炎は、その50%以上に合併するとの報告もある。病態が急激に進行するため、日常から疾患に対する認識をもち、その可能性を疑ったら救命および患肢温存のためできるだけ早期に外科的治療を行うべきである。